Hirosaki University Hospital Bulletin　2006年（平成18年）9月22日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：水沼英樹病院長補佐）

〒036-8563　弘前市本町53
TEL：0172-33-5111（代表）FAX：0172-39-5189
http：//www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

弘前大学医学部附属病院広報誌

南塘（なんとう）だより

第43号
（創刊：1994年12月15日）

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言

弘前大学医学部
附属病院長　花田　勝美

就任６ヶ月目を迎えました。この間，病院経営の根幹をゆるがす問題をいくつか経験させて頂き，先行きの見えない大学附属病院の舵取りの難しさを実感しております。附属病院として前期の最大のイベントは，６月22，23日の両日に，第60回国立大学附属病院長会議（全国病院長会議）が弘前大学を当番校として開催された事です（於：シテイ弘前ホテル）。全国46大学の医学部，歯学部の病院長，事務部長，文部科学省から120名以上の方々にお集まり頂き，大学病院をとりまく諸課題について話し合われました。とくに「診療報酬改定の影響率」，「臨床研修医の確保」，さらに「厳しい病院経営の取り組み」などが話題の中心でした。私自身が関心を持ったのは耐用年数を超えた古い医療機器更新の問題でした（原資がなく，どこの大学でも困っている）。しかしながら結論としては，現時点で長期借り入れは困難とのことでした。今回の会議のハプニングは，会議の直前に巨漢の馳浩文部科学副大臣（元レスリングのオリンピック選手）が突然，当院を訪れたことです。早朝の院長室で，遠藤学長，佐藤医学部長を交えて意見交換を行いました。視察の目的は，当時国会で取りだたされていた「なぜ地方大学に研修医が残らないか？なぜ医師が不足するのか？」の答えを探るためと理解されました。もちろん，弘前大学の取り組みについてもメモされてゆきました。次いで外来新棟の建築状況，附属病院小児科，集中治療部，救急部，放射線部，外来化学療法室などを足早でご覧になり，全国病院長会議にご出席，冒頭大声で「檄」を飛して帰られました。ともかく，明るく，清々しく，勉強熱心な副大臣でした。地方の事情をご理解いただき喜んで帰られましたことは当番校として面目を果たし得たと思っています。なにより，準備に大変な思いをされた病院職員，また，副大臣及び文科省の院内視察にご協力頂いた診療科の先生にはこの場をかりて改めて感謝申し上げます。　医師の確保に加えて，さらに重要な課題を突きつけられています。周知のごとくの７：１看護体制です。本年の診療報酬改定の一環として，従前の１０：１（２：１）看護が必須条件となり，特定機能病院の維持に欠かせません。しかし，この時点でそれ以上の７：１看護（１．４：１）が打ち出されました。高度の医療の提供を掲げた県内唯一の特定機能病院としては，上を目指さなければなりません。さらに大事なことに，看護師さんの加重労働が陰にあります。すでに，７：１看護を目指した中央の有名大学は積極的な好条件（？）で看護師募集を開始しています。今，この戦いに参入することの意味は単に７：１看護を目指すことのみではなく，他大学に引き抜かれる看護師があとを絶たないことから１０：１看護すらおぼつかなくなっているという現実があります。７：１看護実施のためには当院としては87名以上の看護師が必要となります。さらに例年退職者の純減分を加えれば100名以上の看護師が必要になる計算です。ここでクリアしなければならない問題は２点でした。ひとつは大学法人本部から病院として教員及び医療職員の５年５％の人権費削減を求められていることです。看護師数の必要な増加とは矛盾します。しかも，身分が現在の非常勤では集まる看護師も減る一方です。そこで，２つ目の問題解決枠外での常勤採用（３年任期）とすることを，法人本部に求めることでした。医学部長のご支援のもと附属病院一同の願いがようやく聞き入れられ，優秀な看護師獲得の手段が得られました。早速看護部長を中心に行動しつつあります（実際はもう活動していた）。遠藤学長はじめ法人本部のご協力と努力には感謝しなければなりません。当然ながらリスクは伴います。中途半端な人件費増加は収入増加に繋がらず単年度では到底黒字は見込めないからです。新しい人材が附属病院の活力を高め，診療力の向上に繋がることを期待しています。募集の手段としては，新聞，テレビ，本町・文京町の看板，ポスターなどを考えております。足で集めることも必要です。アイデアがございましたらぜひお寄せ下さい。

８月早々，各診療科の先生方と関連の看護師長さんとの意見交換会がありました。お忙しいなかご協力ありがとうございました。今回も主に経営に関連する交換会でしたが，深刻な課題が山積する中，前向きの貴重なご意見も賜りました。できるものから着手して参りたいと思います。

後半のイベントはなんといっても連続出場43回目の「大学ネプタ」の出陣です。法人化した大学全体が一体となるよい機会であったと思います。天候にも恵まれイキ盛んでした。観衆の間からは，歩くだけではなく大学だからなにか「パーフォーマンス」をしては？の声もありました。来年は，更に多数のご参加を期待いたします。

小児科病棟を視察される馳副大臣

全国病院長会議の様子

先憂後楽

自己紹介を兼ねて

事務部長　佐藤　　優

本年４月，北海道大学病院医事課長から事務部長に採用になりました佐藤でございます。出身は，北海道深川市多度志町で，嘗て全国一の赤字ローカル線であった深名線が走っていた豪雪の地であります。医系関係の勤務は，昭和44年６月北大病院管理課が始まりで，昭和50年３月に旭川医大に転任になり，平成７年６月まで庶務課と医事課を行ったり来たり。その後，平成12年４月北大歯学研究科総務課に転任，平成14年11月同医病院医事課に配置換の後，このたびの異動となりました。その間の印象的な事柄としては，先ず旭川医科大学での病院創設と大学院の立ち上げであります。中でも，昭和53年大学院立ち上げの際に，当時本学麻酔学講座の教授であられた尾山先生に多大なるご配慮とご協力を賜り，どうにか設置審まで漕ぎ着けられたことは今でも鮮明に覚えています。また，大学病院の収支・経営について諸議論が始まったこと，時をほぼ同じくして，高度先進医療，特定承認保険医療機関，特定機能病院等の新制度が次々と導入されたこと，最近では平成16年包括評価制度が導入されたことであります。包括評価についてはみなさま既にご承知のとおり，「出来高払い」の見直しがポイントであります。包括評価による診療報酬は，病院費用部分と医師費用部分から構成されており，病院費用には，病室の利用，検査，薬剤などが包括され，これがＤＰＣによる包括支払い部分になり，一方，医師の技術料に相当する，手術料や麻酔料といった医師費用のものは，従来通り出来高払いとなっています。したがって，疾病分類毎の在院日数の適正化あるいは短縮化，また検査，薬剤の真なる必要性等のきめ細かなチェック等が肝要となります。効率化係数，経営改善係数，総人件費５パーセント削減，７：１看護，特定機能病院の維持，大型設備機器の更新等々難問山積の大学病院でありますが，本院におきましては，少ない人員で大車輪で頑張っている事務スタッフと共に，来年度概算と外来新棟に思いを馳つつ，微力ではありますが前向きな対処に意を配し，花田病院長を支えていきたいと思っておりますので，よろしくお願いします。

各診療科の紹介【検査部】

当検査部は血液検査，生化学検査，血清検査，細菌検査，一般検査，生理検査，特殊検査の７部門からなり，年間約180万件の検体検査および生理機能検査を担当しております。ひとつひとつの検査を精確かつ迅速に行い，その結果を適格に報告するよう鋭意努めております。早出出勤による病棟の入院検体集配を行うとともに，外来での診察前検査システムの定着を目指しています。また，中央採血室業務や診療科検査の一翼を担うとともに，病院感染制御センター活動や栄養管理業務など病院機能向上へ貢献する体制を整えております。これらの検査業務が，安全管理の行き届いた効率的で生産的なシステムの下で行われるよう日夜努めてきております。永年の懸案であった輸血部24時間体制も，今年度より医療支援センター制が発足し6月から導入することができました。ただ，新中央診療棟へ移転時導入され，当時最新だった機器や自慢の搬送システムも，いまや故障の心配を抱え更新を考慮する時期に差し掛かっており，頭の痛い問題となっております。

検査部は研究活動も盛んで，新たな検査マーカーや検査法の開発・評価に臨床検査医学講座はもとより臨床各科の先生と共同で取り組んでおります。技師の科研費も毎年コンスタントに獲得してきております。本年11月には保嶋部長が会長となり「臨床検査ルネサンス」をテーマに第53回日本臨床検査医学会学術集会を弘前市で開催させていただくことになりました。約1600名の参加者が見込まれ，一般演題304題，特別講演2題，教育講演7題，シンポジウム4題，パネルディスカッション1題，ワークショップ4題，特別企画，市民公開講座を予定しております。この全国レベルの学会開催を担当するにあたり，検査部は一丸となってその準備に取り組んでいるところです。

臨床検査はあらためていうまでもなく現代の医療に必須で重要な役割を果たしております。今後とも診療科により一層貢献できる検査部を目指していきますので，ご指導ご支援くださいますようよろしくお願いいたします。

（検査部）

薬剤部長就任にあたって

薬剤部長　早狩　誠

この度，弘前大学医学部附属病院薬剤部長に就任しました早狩　誠と申します。二十数年間弘前大学医学部の基礎部門で研究ならびに教育を担当させて頂きましたが，これからは医学部附属病院の一員として臨床の場に身を置くこととなり，緊張の毎日であります。

私は，昭和53年に東北大学大学院薬学研究科（修士課程）を修了後，青森県警察本部（現科学捜査研究所），八戸赤十字病院薬剤部での勤務を経て，昭和56年に弘前大学医学部法医学講座助手として採用されました。その後米国ベイラー医科大学留学後，土田成紀教授主宰の生化学第二講座にて助手，助教授を経て，平成16年より医学部附属脳研施設機能回復部門上野伸也教授のもとで研究を続けさせて頂きました。

私が八戸赤十字病院に勤務した頃の薬剤師は，調剤室でくすりをまさに“モノ”として扱っていた時代でした。しかし現在はくすりに関わるあらゆる“情報”を駆使し，診療の場，チーム医療体制の一員として患者様へPharmaceutical Careを実践するこが求められる時代となっております。また，薬剤部は医療の安全においてくすりに関わるインシデントの軽減，そして病院経営における重要課題－医薬品費削減に努力することを求められております。

附属病院の薬剤部長職は重責でありますが，焦らずかつ着実にその責を果たし，弘前大学医学部並びに附属病院の発展に貢献して参りたいと考えております。今後ともご指導ご支援の程宜しくお願い申し上げます。

イムラン君　手術無事終了

梅雨の明けない７月，聞き慣れぬ異国より来たる青年一人。名前はイムラン。遡ること６年，チェチェン独立紛争の際空爆で受傷した。奇跡的に一命を取り留めたものの，炸裂弾の貫通した頭蓋骨は欠損したままであった。月日は巡り何の因果か当地出身のボランティア女性と出会い，「弘前」が取り持つ縁で当院に入院，手術を受け無事退院となった。

そして今日（８月18日）日本を発ち帰国の途に着いた旨の報を受けた。平和な日本では戦傷者の手術に関わるのはこれが最初で最後であろう。ビール片手にほっと一息つきながら思いを馳せた‥帰国後どんな人生を送るのであろう。チェチェンでは独立を勝ち取るまで紛争は続く見込みらしい。将来，彼が独立紛争に身を投じる可能性もあるのだろうか。ならば今回の手術に意味はあったのか。医療は平和の中でこそ意味を持ち，軍事の前では無力である一回の手術で救える命は一つ，一回の爆撃で失われる命は幾多。といっても平和な日本では無縁のこと‥と断言出来るであろうか？戦争の記憶の風化が急速に進む中，恒久的と錯覚されている日本の平和が風前の灯火となる日も遠くはないのかも知れない。とすると戦傷者の手術経験はこれが最後にはならない？？‥等々考えるうちに酔いも醒めた。奇しくも彼が退院したのは８月15日，日本の終戦記念日であった。

今回の治療に関し院内の多くの方々に御協力頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。　（脳神経外科）

退院するイムラン君と関係者

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われ，弘前大学のねぷたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として，１日，３日，５日の３日間参加し，昭和39年に初参加以来，連続43年の出陣を果たしました。

初日には医学部附属病院構内において，小児科に入院中の子供達を先頭に病棟医師，看護師及び事務職員等による「小ねぷた」が運行され，子供達は太鼓と笛の音にあわせて「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

今年の弘前ねぷたまつり期間中は天候にも恵まれ，本学のねぷた出陣には遠藤学長，花田病院長をはじめ多数の教職員，留学生及び近隣町会の子供達等も参加し，子供も大人も一体となって弘前市内を練り歩き，津軽の夏祭りを盛り上げました。　（総務課）

七　夕　祭　り

七夕は古くから日本に伝わる五節句の一つです。短冊に願い事を書き，笹の葉に結んだ笹飾りを供物と共に七月七日の夜に星に手向けた形式が今に伝わっています。

一病棟３階では，小児科に入院している子供達のために，年間行事の一つとして取り入れています。七夕の一ヶ月前から，院内学級の子どもたちや先生，保育士が中心になり七夕飾りの制作が始まります。今年は折り紙の本やインターネットから，いろいろな飾りの情報を取り入れました。そして，ご家族や医師・看護師も加わって，たくさんの飾りが出来ました。２～３日前には，毎年有志の方から大きな笹が届けられます。笹が来ると子供達の目がきらきらとして，待ってましたとばかりに飾り付けが始まり，誰がどんな願い事をしたか当てっこしたり，満足そうに眺めたりして，楽しんでいました。

今年はもう一つお楽しみが加わりました。七夕当日に，院内学級の母体校である朝陽小学校で活動している「お話し・おすすめ隊」のボランティアの方達が来て下さいました。プレールームで子供達に七つのお話をしてくださり，とても盛りあがりました。お話の後に，みんなで織り姫と彦星が出会いますように，そして，みんなの願いが叶いますようにと，大きな声で七夕の歌を歌いました。

（一病棟３階　保育士　小田桐登喜子）

第35回 東北地区国立大学病院野球（ソフトボール）大会を開催

東北地区国立大学病院野球（ソフトボール）大会が去る８月26日，27日の両日，東北大学病院を当番校として秋保リゾート森林スポーツ公園で開催された。

本大会は，弘前大学，秋田大学，山形大学及び東北大学の４大学病院対抗野球として昭和47年第１回大会以来，連続して開催されており，今回は第35回目となる。今年度は参加選手等の都合などから，ソフトボール大会の開催となった。

大会２日間とも好天に恵まれ，弘前大学病院チームは，練習の成果を存分に発揮し，初日は秋田大学に辛勝，２日目は東北大学に最終回逆転し，２大会ぶりの優勝を遂げた。

また，大会初日の26日には，同スポーツ公園内バーベキューガーデンに於いて４大学による懇親会が行われ，和気藹々とした雰囲気の中，互いの親睦を深めた。

来年度の第36回大会は，弘前大学の当番で開催される。

（総務課）

優勝した弘前大学病院チーム

平成１８年度青森県原子力防災訓練
～附属病院にて負傷者搬送訓練を実施～

７月28日，六ヶ所村の日本原然再処理工場で臨界事故が発生したとの想定で，青森県及び六ヶ所村の主催で原子力防災訓練が行われ，本院も県の要請を受け参加しました。この防災訓練は，県と六ヶ所村の他に陸海空自衛隊，経済産業省，海上保安庁など30を超える各団体や地域住民も参加した大規模なものでした。

「被ばくをともなう負傷者が発生し，県の防災ヘリ及び救急車で六ヶ所村から弘前大学医学部附属病院に搬送する」というシナリオで，院内では搬送ルート及び救急部内部を養生（特殊ビニルシートで覆う）し，救急部医師，看護師，放射線技師らも防護服を着用して搬送された模擬患者の診療やサーベイ（放射線の汚染検査）を行いました。本番さながらの臨場感あふれる，緊張感をもって行われた訓練でした。　（総務課）

防護服を着用し，模擬診療する医師ら

津軽地区治験ネットワークについて

以前より国内での治験（新薬の承認申請のために行う臨床試験）は時間，費用がかかり，質が良くない，という問題点が指摘されていたところです。このため治験は外国へと流れ「治験の空洞化」という問題や，外国で使用されている医薬品が日本では未だに使用できないという事態が生じています。このような状況を改善するため国の施策として，治験活性化のための種々の方策が進められています。効率的な治験実施を目指した「治験ネットワーク」もその取り組みの一つですが，弘前大学医学部附属病院においても，周辺中核医療機関や地元医師会会員28施設のご協力を得，H17年8月に津軽地区治験ネットワークを組織しました。

また，日本医師会治験促進センターが事務業務を行う厚生労働省の大規模治験ネットワーク基盤整備研究事業から2年間，研究助成を頂くこととなりました。

私どもは，今後ネットワーク参加中核病院所属CRC養成の支援を行い，またネットワークとして治験受託に向けた基盤整備に取り掛かる予定です。中心となる医学部附属病院にはIRB審議の充実や，有害事象発生時の緊急時対応病院としての役割も求められます。治験ネットワーク推進の結果として，新規医薬品の承認が早まり，治療効果の高い薬物が一刻も早く使用できることを目指していますが，一朝一夕に成果の得られない事業でもあります。院内各部署に何かとご負担をお願いすることもあると思いますが，何卒この趣旨をご理解の上，お力添えを頂けますようお願い致します。

（治験管理センター　立石智則）

～菅原元薬剤部教授が弘前大学名誉教授に～

菅原和信元薬剤部教授が平成18年４月１日付けで弘前大学名誉教授の称号を授与されました。

院内コンサート　6月30日　『夏を歌う』熊木　晟二，熊木　美紀子，猿賀　智美
7月28日　医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル

患者サービスの一環として実施している院内コンサートが，６月及び７月ににいずれも午後６時45分から外来待合ホールで開催されました。

６月30日は４月に引き続き，熊木先生ご夫妻と娘さんの猿賀智美さんが参加し，『夏を歌う』と題して開かれました。

プログラムは，猿賀智美さんの〈アルト・ソロ〉３曲，熊木先生の〈バス・ソロ〉４曲，みんなでうたいましょうとして『幸せなら手をたたこう』，最後に〈デュット〉でメドレー『日本のこころ』・『白いブランコ』のピアノ伴奏を奥様の美紀子さんが努められました。

また，７月28日は，院内コンサートの常連である「医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル」を迎えてのコンサートが開かれました。プログラムは，バロック風日本の四季より「夏」，モーツアルトのチェンバロと弦楽のためのコンチェルト，ヴィヴァルディのフルート協奏曲，さらにコレルリの合奏協奏曲など。

両コンサートともに，大変盛り上がり，会場の大勢の患者様たちには充分満足の様子で大好評でした。　（医事課）

【編集後記】

例年，ねぷた祭が終わる頃には爽やかな秋風を感じるのが常であった。しかし，今年は本格的な夏が遅かったせいか，お盆が過ぎても残暑が居座っているようだ。世界各地で自然災害が発生している現状を見ると，いくら科学技術が進歩した先進国といえども，自然の力には屈服せざるを得ないようである。年々変化する自然環境に，将来この地球はどのようになってゆくのか，思わずため息がでるこの頃である。

さて，「南塘だより第43号」をお届け致します。各大学とも独法化後の病院経営には苦労しておりますが，最近では７対１看護など矢継ぎ早に新たな問題が提起され，なかなか光明が見えてこないようです。

そのような状況下に，今回脳神経外科で手術されたチェチェン難民，イムラン君の笑顔の退院は，国際貢献の観点からも明るい話題かと思っています。原稿をお寄せ頂きました各位に心からお礼申し上げます。

（広報委員　棟方博文）